

恣意の空間と摂理の空間（その一）

——『リア王』の浜セリ採り・覚え書き——

松 下 千 吉

I

(1) 『リア王』四幕六場の初め、ドーヴァに近いなかで、エドガー扮する乞食のトムが老父グロスターに「海の響きが聞こえましょう」というあたりから始まるドーヴァ叙景の一節は、庶子エドマンドの策略にかかって両眼を抉りとられる憂目にあい、絶望のはてに投身を覚悟した老父グロスターに、たんなる平地（もしくは多少の起伏地）をドーヴァの断崖と思いこませようと心をくだくエドガー苦心の叙景であるという意味で、（簡素な舞台背景を補うのを常とする）シェイクスピア劇中の数ある情景描写の中でも、異色の叙景である。「道は平らなようだが」といぶかるグロスターに、「おそろしく険しいです。ほら、海の響きが聞こえましょう」とエドガーは答える。「いいや、ちっとも」とグロスターがなおもいぶかるのにたいして、エドガーは「それでは、目のお痛みのために、ほかの感覚までも鈍くなられたのですよ」と言いきかせたりしたあげくに、周知の情景描写を始める。

Edg. Come on, sir ; here's the place : stand still. How fearful

恣意の空間と摂理の空間（その一）

And dizzy 'tis to cast one's eyes so low !
The crows and choughs that wing the midway air
Show scarce so gross as beetles ; half way down
Hangs one that gathers sampire, dreadful trade !
Methinks he seems no bigger than his head.
The fishermen that walk upon the beach
Appear like mice, and yond tall anchoring bark
Diminish'd to her cock, her cock a buoy
Almost too small for sight. The murmuring surge,
That on th' unnumber'd idle pebble chafes,
Cannot be heard so high. I'll look no more,
Lest my brain turn, and the deficient sight
Topple down headlong.

エドガ。ああ、ここですよ。じっと立っているのです。そそり立つ断崖を
足もと直下に見おろすと、なんとも恐ろしく目がくらむ。
中空を飛んでいる鴉や紅アシ鴉も、
やっと甲虫ぐらいいに見える。はるか下、断崖の中ほどに
ぶらさがって浜セリを採っている男がいる。恐ろしい生業だ。

五体が頭一つぐらいにしか見えない。

落^{おち}をあるいている漁夫たちはハツカ嵐のように見え、

その向うに錨をおろしている帆柱の高い船は

解^はのように小さく、その解はまた浮標^{うしり}のようで、

目にもとまらないほどです。大浪は数え切れない

益^ちなき石ころをゆるがして碎けてはいるが、その浪音も

こう高いところでは聞こえない。いや、もう見るのはよそつ、

頭がぐらぐらして、目がまわって、

まっ逆さまに落っこちそうだ。

この情景描写にみられるエドガーの苦心・細心ぶりを、どのように受けとるかについては、古くから、意見の分かれるところであって、たとえばジョンソン博士が、この描写にみられる「計算」(computation)をあまり好まず、一度ならず批判的な見解をのべていることは、ファーンズ編の集註版にものつていて、よく知られている。いまその一端をあげてみよう。(King Lear, in *The New Variorum Edition of Shakespeare*, ed. by H. H. Furness pp. 266—268)

この叙景はアディソンの頃からずいぶん賞讃されてきた。：たしかに描写は凡庸ではない、が、私には、それが詩の極致にまで練り上げられているとはとても思えない。断崖から見おろす人は、逆らいようもなく、すいこまれるように墜死してしまうのではないかという、それら恐ろしい圧倒的な思いにおそわれるものである。けれども、私たちの心が我にかえって、細部の点景に目をとめ、個々の事物に注目できるようになるとたんに、

その圧倒的な印象は消散し、弱まってしまふのだ。鴉や紅^{べに}アシ鴉、浜セリ採りや漁夫たちを列挙することは、断崖から見た光景の与える絶大な効果にたいして逆効果となるのである。というのは、それらの点景は断崖の空漠たる空間に生き物の気配を与え、その結果、私たちの心が恐ろしい虚空の中をまっさかさまに墜落するのを中断するのだから。：

あの叙景はひたすら断崖のみに終始すべきだ——空漠たる断崖であるべきだ。鴉は私たちの墜落をはばむ。いやが上にも小さく見える解^{はじ}やその他の点景は、いずれも好箇の叙景ではあるけれども、断崖の圧倒的な高さの恐ろしさを一挙に心に印象づけることはない。印象は分断され、私たちは高さを計算しながら、恐ろしい空間を一段一段とおりでゆくのである。

ドーヴァの断崖は実際に百メートル近くもあるのだから、そういう断崖の頂きに立った人間が、普通に眼の見える常人ならば、おそらくジョンソンのいうとおり、まず断崖の圧倒的な高さから受ける恐ろしさが先に立って、エドガーの語るような細やかな観察は二の次になるのが普通であろうし、そう意味で、ジョンソンの批判にはそれなりの道理はあろう。けれども、このジョンソンの見解にも一つの盲点があるように思われる。それは、ジョンソンよりほぼ一世紀後の編註者で、同じくファーンエスの集註版に引用されているチャールズ・ナイトの評釈も指摘しているように、エドガーの叙景は盲目の人間にたいして断崖の圧倒的な高さを感知させるという特殊な目的と状況のもとになされるものであり、そのためには、エドガー流の計算された点景描写による方がより効果的であろうということ、そして、ジョンソンの批判ではこの点が度外視されているように思える、ということである。ジョンソンが、内面的な寓意を含まない純粹な叙景として日頃から推賞していたコングリーヴの『喪に服する花嫁』(William Congreve: *The Mourning Bride*, 1697) の中の大寺院の描写と、『リア王』の断崖叙景の一

節とを比較して、コングリーヴの方がより秀れているとかなり頑固に言いはっているのも、一つには、両者の劇中の文脈を度外視しているからでもあらう。

(2) エドガーの叙景にたいして、ジョンソンに代表されるような見解と、ナイトに代表されるような見解との、いずれをどの程度によしとするかについては、各人さまざまであらうが、いずれの見解にどの程度共鳴するにしても、なお考慮を誘う問題が残る。それは、エドガーの叙景にみられる細心さ、あるいはジョンソンのいう計算は、盲目の老父に（そして、ひいては観客に）、ただ単に高さの恐ろしさだけを感知させるためのものにすぎないであらうか、という疑問である。

グロスターは目を抉りとられる以前に、ドーヴァの断崖を目撃したことがあって、自分でも、エドガー扮するトムにめぐり会った当初に、それを次のように描写してみせている。（四幕一場七三―七八）

Glow. There is a cliff, whose high and bending head
Looks fearfully in the confined deep ;
Bring me but to the very brim of it,
And I'll repair the misery thou dost bear
With something rich about me ; from that place
I shall no leading need.

グロス。そこに断崖があつて、高くそそり立って前かがみに突き出た絶頂が、断崖に阻まれた大海の深みをおぞましくのぞきこんでいる。

怒意の空間と摂理の空間（その一）

ちようにその断崖のふちぎわまでわしをつれていってくれ。

そうすれば、金目になる身のまわりの物をとらせてやって、

お前が耐え忍んでいる貧乏をなんとかしてやる。

そこから先は案内はいらない。

一方、エドガーも、グロスターから、ドーヴァ（への案内）を知っているかと再度きかれて（四幕一場五四、七一）、知っているというからには、以前に訪れたことがあったはずである。したがって、どちらの立場からいっても、エドガーの描写の迫真性に少しでも手ぬるさがあってはなるまい。それに、グロスターのように、かつてその場を見たことがありながら、その後盲目になっている場合には、そういう人間にたいしてする叙景は、概観的な全体描写はもとより、細部の点景描写にまでその配慮がゆきとどくのは当然のことであろう。にもかかわらず、エドガーの叙景の細心さは、たんに圧倒的な高さを感知させるためというだけではなくて、より内面的な意味をもはらんでいるように思われてならない。

II

(1) 先にあげたグロスター自身による断崖描写の「高くそそり立って前かがみに突き出た絶頂が、断崖に阻まれた海の深みをおどましくのぞきこんでいる」(Whose high and bending head Looks fearfully in the confined deep)という詩行のイメージには、閉ざされた死の深淵に投身せんと心を決めていたグロスターの心態と命運が、すでに予言的に暗示されているのであり、エドガーはこの二行を含むあの一節全体からグロスター投身の意図を察知したのであろうが、たとえば、あの一節の後半の「その断崖のふちぎわまでわしをつれて行ってくれ。：そこ

から先は案内はいらない」(Bring me to the very brim of it... from that place I shall no leading need.) というくだりがなかったとしても、エドガーは先の二行だけでグロスターの意図を読みとったであろう、とさえ思えるほどである。が、いずれにしても、このグロスター自身による叙景とエドガーの叙景とを対比してみると、グロスターの閉ざされた深淵にたいして、エドガーの叙景には、恐ろしい断崖のふんい気はみなぎっているにしても、ある種の開かれた展望あるいは観照ともいうべきものがあるのではないだろうか。というのは、恐ろしい高さをつたえるために用いられている点景——(甲虫のように見える) 鴉たち、(人の頭ぐらいいに見える) 浜セリ採り、(鼠ほどに見える) 漁夫たち——は、すべて生きて動くもの、しかも、それぞれの生の営みに無心に動いているかに見える生き物たちである。(それらは、たとえば三幕四場(一二三)で、エドガーの扮するトムがグロスターにはじめて出会うときに、自分の食べ物としてあげるヒキ蛙や、オタマジャクシや、ヤモリや、ハツカ鼠などが感じさせる、いわば、キャリパンのな動物性とは対照的な気韻をかもし出している。) さらに、小舟ほどにしか見えない帆船や、いやが上にも小さくみえる解^{はしり}は、いずれも、人間の生きる営み、すなわち、生業^{なりわい}を示唆するイメージであって、これら生き物や生業の点景がこの恐ろしい断崖の空間に点在することによって、この断崖(といっても、エドガーが言葉によって描き出してみせる幻の断崖)には、一種のひそやかな生氣がただよう結果になっている。ジョンソンの用いた言葉を転用するならば、これらの点景がこの断崖に人(や生き物)の気配を与えている(peoples)のである。そして、この目立たない無言の生氣ともいうべき気配が、エドガーの叙景において、グロスターのそれとはもっとも対照的な要素となっていることはいうまでもない。ちなみに、グロスター投身の直後に、それを断崖の下から見えていたことになっていた農夫としてのエドガーが、断崖の空間を再び叙景してみせる一節でも、空高くにいて見えない雲雀^{ひばり}のイメージが、やはりひそやかな生氣を断

崖に漂わせている。

(2) いま、生業なりわいといったが、これらの点景のなかでも、人間の生業の不思議さ、その本源的な意味や極限的な有り様について、われわれの思惟を喚起せずにはおかないのは、浜セリ採りのイメジであろう。（たとえば、『出エジプト記』・二五章―三二章において、神がその聖所造宮のためにイスラエルの民に命ずる仕事の多様さと、それぞれの仕事に応じた知恵と巧みを持てる氏族を在らしめようと告げる高遠な神慮の絶対性、などを想起せずにはおれない。)

浜セリはイギリスやアイルランドの岩がちの海岸に生える香辛植物であるが、当時、ドーヴァの浜セリは特に有名であったらしく、シェイクスピアと同時代のドレイトンの風物詩集 (*Michael Drayton: Poly-Olbion*, xviii, 1622) などにもドーヴァの浜セリへの言及が見られることは、註釈書の教えるところである。また、ロープに身を託し、断崖に宙づりになっている浜セリ採りの恐ろしい情景をした（たぶんアイルランド南部か）ウォータフォード地方誌の一節をあげている註釈書も少なくない。エドガーの叙景では、その恐ろしい情景は、

Half way down

Hangs one that gathers sampire, dreadful trade!

He thinks he seems no bigger than his head.

という簡潔な詩行の、とくに 'hangs' という言葉の潜在力によって伝えられる。「はるか下、断崖の中はどのところに」という詩句のあと、行をまたいで次行の冒頭に、いきなり、それ自体も宙づりになるかのごとくおかれ

ているこの言葉のイメージは、そそり立つ断崖の半ばに宙づりになっている浜セリ採りの恐ろしい情景を彷彿とさせている。(ちなみに、この一節の 'hangs' という一語がわれわれの想像力に働きかける秀れた暗示力について、ワーズワスは一八一五年版詩集の序文 (Preface to The Edition of 1815) の中でふれているが、それは、この一節のこの一語にたいする数少ない評釈の一つであらう。)

(3) ところで、エドガーはこの浜セリ採りの仕事を 'dreadful trade'・「恐ろしい生業」と呼んでいるが、'tread' に由来するこの 'trade' という言葉は、エドガーが好んで用いた言葉であり、別の機会に、しかも同じグロスターを前にしての傍白で、用いている。それは、目の前のトムがエドガーであると知るよしもないグロスターが、エドガーとの和解の機会を切望しつつ人間の運命について述懐する周知の場面である。(四幕一場三一三八)

Glou. He has some reason, else he could not beg.

I th' last night's storm I such a fellow saw,

Which made me think a man a worm. My son

Came then into my mind; and yet my mind

Was then scarce friends with him. I have heard more since:

As flies to wanton boys, are we to th' Gods;

They kill us for their sport.

Edg. [*Aside.*] How should this be?

Bad is the trade that must play the fool to sorrow,
Ang'ring itself and others. (*Aloud*.) Bless thee, master!

グロス。すこしは正気とみえる、でなければ物乞いではきまい。

ゆうべの嵐のさなかにも、わしはそういう奴に会ったが、

それを見ると人間も虫けら同然と思えたものだ。そのおり倅のことが

頭に浮んだ、けれども、その時はまだ仲直りの気持ちがなかった。

しかし、その後いろいろと聞きおよんでいる。

神々にとってわれわれは、悪童たちに弄ばれる蝶や蜻蛉とんぼも同然だ。

神々はたわむれにわれわれを殺すのだ。

エドガ。〔傍白〕これはどうしたわけだ。

悲しんでいる人にむかって阿呆のまねをしなければならぬとは、つらい生業なりわいだ。

自分でも腹が立ち、人をおこらせる。〔グロスターに〕ごきげんよう、だんな様。

ここでエドガーは、言いた老父の前に、素姓を隠して乞食のふりをしなければならない運命になった自らの境涯を“trade”という言葉であらわしている。この言葉を、クレイグの註釈のように、文字どおり「道をたどる」(to tread a path)という意味をこめて解しうるかどうかは別として (W. J. Craig, cit. in *King Lear*, *The Arden Shakespeare edition*, ed. by Kenneth Muir, p. 149) この素朴な一語は、多少道化した口吻を含んで用いられているものの、自らの定めとしての生業の道に労苦するほかはない人間の忍従の姿を暗示している。そ

して、それは、グロスターが人間の生死を気ままな神（々）の恣意のままなるものと観じ、ひいては、（上の一節のすぐ後にくるグロスターによる断崖叙景の一節が示唆しているように）グロスター自らの生死を自らの恣意のままと暗に考える心態とは、対照的である。

同じことはエドガーの断崖叙景における「恐ろしい生業」（dreadful trade）という言葉についてもいえることである。盲になったグロスターは、トムことエドガーとの邂逅の発端となる場面で、近くでエドガーがそれとなく見守っているとも知らず、つきそっていた老忠臣とのやりとりのなかで、「目の見えた時には、つまづいたものだ」（I stumbled when I saw. IV, 1. 19）と述懐し、また、そのすこし後に、エドガーにむかってドーヴ・アへの案内を頼もうとする直前のくだりで、昔は念頭にさえなかった貧しい者たちへの共感を（荒野におけるリア同様に）示したりして（四幕一場六五）、その内面にかすかにではあるが開眼の萌しが見えはじめている。けれども、それらと前後する、すでにあげた一節（四幕一場三六）で「神々にとって人間は悪童たちに弄ばれる蝶や蜻蛉も同然だ」と観じたりすることからもうかがえるように、この時期におけるグロスターの開眼はまだ仮り初めの段階を出ていない。そういう情況にある老父の内心の動きを一刻一刻見守っているエドガーは、グロスターが恣意的に自らの命を断とうとするその断崖を、おそらくは唯一の生業の場として生きるほかはない人間のあることを語ることによって、生きて在ることの重大さを老父グロスターの心にいよいよ深く刻みつけようとしているのではなからうか。断崖叙景の結び近くには、あたかもこの「恐ろしい生業」（dreadful trade）と対照されるかのごとくに、大浪に洗ひゆさぶられる「無数の益なき小石」（th' unnumber'd idle pebble）の姿があって、そこだけは一見駘蕩たる風景の真上で、宙づりになって生業にいそむ浜せり採りの恐ろしさをいっそうきわだたせている。

III

(1) エドガーの断崖叙景がこのような内面的な意味をはらんでいたとしても、それは必ずしも、エドガーがその叙景を通して、グロスターの投身の決意をできれば事前に翻えさせたいとすら考えていた、ということではない。グロスター投身の前後におけるエドガーの言動には、たとえば、倒れたグロスターを案じてつぶやく「命をとられたかと思っているときには、思いこむあまりに実際に命がこと切れてしまうかもしれない」という言葉のように、懊悩に疲れてはたグロスターを、できれば投身という（たとえ虚構であつても）出来事を経ないで、絶望から救いたいと願っていた、というふうにとれるふしもないではない。けれども、大局からいえば、グロスター投身の寸前にエドガーがもらす「このようにあの絶望を翻弄するというのも、それを直してあげたいからこそだ」という言葉も示唆するように、エドガーは、グロスターを絶望から救うには、もはや、投身という出来事を経るほかはないと考えていた、とする可能性の方がより大きいといわねばならない。いずれにしても、エドガーにとって、よりいっそう、そしてもっとも重要であつたのは、投身という出来事の後をとわず、あらゆる契機をとらえ、グロスターの開眼あるいは回心をできるかぎり促しすすめることであつたはずであり、そういう意味で、エドガーは断崖叙景（なかでも浜セリ採りの点景）がグロスターの心の内奥にどれだけ深い意味をおびて投影されるかを、人知れず見守っていたのではなからうか。

(2) このことと関連して、グロスター投身の前後の文脈で、いま一つ考慮しておかなければならないことがある。断崖叙景の直前には、エドガーの「言葉づかいも言うことも立派になつたようだが」とグロスターが感じとつたほどに、エドガーは高揚した心魂をこめてあの叙景をするのであるが、（やはり彼の予想どおり）グロスターが

投身すると、その様子を断崖の下から終始見ていたことになっていた農夫としてのエドガーは、気のついたグロスターにむかって、彼を断崖の頂きにまでつれていったのは「あれは悪魔だった：何事にも明るい神々があなたを助けて命びろいをさせて下さったのですよ」と言いきかせるのである。この一節を視点にして、グロスターの立場にたつて、断崖叙景をふりかえるならば、エドガーの叙景は悪魔による叙景であったことになり、すでにみてきた断崖叙景の内面的意味とは一見矛盾することになるかに思える。けれども、この悪魔云々の一節にもかかわらず、エドガーの叙景が、あの時点でのグロスターにとって、あのような内面的な意味をはらみうる可能性は依然としてこのころであり、さらに、投身後のグロスターにとっても、(トムの言動がリアにとってしばしば反語的・逆説的であったように)、あの叙景は、(悪魔による)反語的・逆説的な言葉という形をとりつつ、その本来の内面的意味を徐々に示顕する可能性をも、もつことになるのである。(ちなみに、悪魔云々の一節に答えるグロスターの言葉の冒頭の「今は思いあたることもある」(I do remember now.)という、言及範囲を限定しにくい一句は、その萌しを示唆しているといえないだろうか。)

そのうえ、観客は、この一節が、投身という瞬間的出来事の前後で一人二役を演ずるほかないための方便であるばかりでなく、それは、迷信ぶかいグロスターに投身への衝動という邪念(worse spirit, IV. vi. 217; *ill thoughts*, V. ii. 9)を客観視させ、同時に神々の恩寵を感得させるための方便でもあったこと、そしてまた、その神々というのは、老父グロスターにたいするエドガーの愛情(という形であらわれた摂理)にほかならないことを、じゅうぶん承知しているのである。エドガー扮するトムがリアにとって守護神的な役割を果していることを指摘した批評家もあるが(Northrop Frye: *Fools of Time*, pp. 106—107) エドガーはリアにたいしてのみならず、グロスターにたいしても、同様に、守護神的な役割を果して、われわれは、エドガーがトムとして

登場以来、終始、そのような存在としてエドガーの言動を見守っているのである。したがって、悪魔云々の一節にもかかわらず、観客にとって、エドガーの断崖叙景はあくまでもエドガーの叙景であって、あの叙景がその直接の文脈をこえた内面的な意味の光を投ずることがあっても、それをあの悪魔云々の一節がさまたげることにはならないのである。

(3) エドガー叙景の断崖が現実の断崖ならば、投身の気配を察知したエドガーはグロスターを引きとめるのが自然であろうが、グロスターの場合、幻の断崖は実は平地であり、また、エドガーは、グロスターを絶望から救うには、十中八九、投身という出来事を経るほかはないと予想しているのであってみれば、エドガーがそれを引きとめる必要も、必然性もなく、盲目のグロスターは、結局は、投身という出来事を経験することになる。このことは、別の面からいえば、グロスターの絶望がそれだけ深いものであったことを示唆していて、グロスターが投身の直前にする祈りの言葉は、その絶望の深さをものがたっている。けれども、この祈りの一節には、たんにそれだけではなくて、エドガーの断崖叙景が、グロスターの心に、かすかながら、その開かれた観照の光りの一端を投影したのではないかと思えるふしが、なくもないのである。

Glow. O you mighty Gods !

The world I do renounce, and in your sights

Shake patiently my great affliction off ;

If I could bear it longer, and not fall

To quarrel with your great opposeless wills,

My snuff and loathed part of nature should
Burn itself out. If Edgar live, O, bless him !

グロス。おお、大いなる神々よ、

この世をわたしは棄てて、おん眼差しのもとで

身につきまとう大きな悩みを心しずかに振り落します。

この悩みをもっと耐え忍び、そして逆らうべくもない

御意にたいしてあらがいはしないといたしましても、

焼けこげた蠟燭の心同様の忌わしいこの残骸は、

やがて燃え尽きるものであります。エドガーが生きて在りますならば、彼を幸いしたまえ。

この一節を、すでにみた「神々にとって人間は悪童たちに弄ばれる蝶や蜻蛉も同然だ」というグロスターの言葉と比べてみると、上の二節にみられる静かな諦念と神々にたいする謙虚さは、(投身直前という切迫した心境からであるにしても)、これまでにはみられない純一・真摯な響きをもっているものであり、それは、エドガーの高爽な叙景およびそれにこめられた老父への深い愛情とあいまって、平地での虚構の投身という本来なら奇異でこっけいな出来事との不思議な均衡をかし出しているのである。が、それはかりではなく、ここにおける「おん眼差しのもとに」(in your sighs)という一句が、たんなる常套語ではないとするならば、それは、エドガーの断崖叙景における観照から、グロスターが万象に注がれる上位者の眼差しを、かすかにでも、感知したことをものがたっているのではないだろうか。グロスターは断崖の空間に点在する人間や生き物たちの姿を自らの内なる目ではるかに見おろすことによって、自らの上に注がれている神々の眼差しを今更のように想起したのではない

だろうか。いずれにしても、この祈りの一節は、「蝶や蜻蛉」の一節にたいしてよりもむしろ、次にあげる四幕六場二一七のグロスターのいま一つの祈り、すなわち、投身から救われ、荒野において錯乱のリアと再会する場面があったあと、グロスターの口からはとんどわれしらずもれる祈りに、より近い心境を示唆しているように思われ、また、投身という出来事を越えて、すでに後の祈りを予示しているのではないかとさえ思えるのである。

Glou. You ever gentle Gods, take my breath from me:

Let not my worser spirit tempt me again

To die before you please!

グロス。常に憐み深い神々よ、わが息の根をいつなりと取り去りたまえ。

ただ、ふたたび邪氣にそそのかされて、御意を待たずに

死ぬことのなからんことを。

IV

(1) 『リア王』の物語そのものの時代背景は、もとよりキリスト教伝来以前のことになってはいいるが、そのこととは一応無関係に、この劇の主題または部分的表現にキリスト教的な含蓄を読みとることが（観客として）可能なのは、いうまでもない。（といっても、この劇全体をキリスト教的な思想に貫かれた作品と見なすかどうかという、より広大なそして困難な問題とは、別としてであるが。）たとえば、当面の論点にもふれる面というならば、『新修シェイクスピア』版・『リア王』の編者の一人ダシィも指摘するように（*King Lear, The New Shake-*

speare edition, by G. I. Duthie and Dover Wilson, p. xli) 投身直後のグロスターにエドガーが悪魔云々という例の一節のあたりに、『マタイ伝』(四章・五—八)で悪魔がキリストを誘惑する場面を想起し、さらに、忍従をまなびとるグロスターの周囲にキリスト教的なふんい気を感じとることも、可能であろう。もし、この聯想が無理からぬことであるとすれば、浜セリ採りのイメジにキリスト教的な意味合いを読みとることも、可能なものであり、また、不自然ではあるまい。

というのは、浜セリの名‘sampire’ (Mod. E. ‘sapphire’) は、註釈書の多くが教えるように、‘herbe de Saint Pierre’に由来するというし、またイギリスでも時には‘St. Peter’s herb (or wort)’と呼ばれることもあるという。そして、このように浜セリが聖ペテロの名前で呼ばれるようになった所以は、いうまでもなく、それが岩がちの海岸に生えることと、もと漁夫であった聖ペテロが初期キリスト教会の基としての岩 (petra) と呼ばれた故事 (『マタイ伝』一六章・一三—二〇) とからの聯想によるものであろう。とするならば、断崖に宙づりになって「聖ペテロの草」すなわち浜セリを採る人の点景から、ペテロの境涯——十二使徒たちの中でも、とりわけ人間的な激情に揺り動かされつつキリストの忍従をまなぶ運命を担っていたペテロの境涯——を想起する観客があっても、不思議ではなからう。そして、もしもこのような聯想が不自然でないとすれば、断崖中空の浜セリ採りの点景は(観客という視点からいえば)、投身直前のグロスターにとっても、また、そういう直接の文脈を越えて劇全体の主題の展開にとっても、よりいっそう深い象徴的な意味をおびてくることになるのではなからうか。

(2) さきに、ドーヴァにいたるまでのグロスターの世界観、とくに「神々にとって人間は悪童に弄ばれる蝶や蜻蛉も同然」という言葉に象徴される世界観には、恣意的な死生観がひそんでいることについてはふれておいたが、

恣意といえ、それはエドガーにとっては、人間の内面の原罪的な領域として意識されていたことが、エドガーの言葉の一端からうかがえるのである。四幕六場（二七三—二七五）がそのよい例であるが、エドガーはそこで思いがけなく入手したゴネリルからエドマンドあての内密の手紙の中味を知って、次のように言う。

Edg. O indistinguish'd space of woman's will !

A plot upon her virtuous husband life,

And the exchange my brother !

エドガ。ああ、女の色欲の果てしない広がり。

あの徳あつき夫君の命をねらう謀りごと、

しかも、替りの相手がおれの弟とは。

この一節で‘will’というのは、これも註釈書の教えるとおり‘lust’の意味であろうが、かりにこの‘will’の意味を意欲・恣意という意味にまでおし広げ、さらに‘woman’s’の代りに‘man’s’をあてるならば、あの一節の最初の一行は、人間誰しもの内面に広々と広がるかと思える恣意・原罪の空間を示唆することになる。そしてこの空間を（文脈を遡るという意味ではなくて、自由な暗喩として）グロスターの状況に移しかえてみるならば、盲目のグロスターが恣意的に投身しようとしたドーヴァの断崖も、彼自身にとっては、自らの内面に広がる恣意・原罪の空間の一端にほかならないことになる。グロスターはこの空間に恣意のままに投身しようと考えたのである。とすれば、その空間に宙づりになって生業にいそしんでいる浜セリ採りは、その空間が実は決して恣意の空間ではないことを、痛切に語りかけていることになろう。

別の言い方をするならば、グロスターは、この断崖に投身する前も、また、投身して救われた後も、終始、浜セリ採りと同様に、いわば、摂理の空間に宙づりになっているのであり、エドガーは断崖叙景の中心として浜セリ採りの点景を加えることによって、グロスターが、投身の前後にかかわらず、そのような意味に気づいてくれるかもしれないという、祈りにも似た気持ちをいだいていたのではなからうか。そして、もしジョンソン博士の言う計算 (computation) ということを考えるとすれば、断崖の高さを感じさせるための計算はいうまでもないが、それにもまして、グロスターの心の内奥の動きにたいするエドガーの考量をこそ、真の意味での計算とすべきではないだろうか。

V

(1) 恣意の空間にたいして、摂理の空間という言葉をかりに用いたのであるが、われわれの内面において、恣意の空間を摂理の空間に変容させる最も大きな動因の一つとなるものは、時間の意識であらう。といっても、むしろ、日常的、物理的な時間の意識ではなくて、摂理・恩寵としての時間の意識である。ところで、エドガーはそういう意味での時間の意識をとりわけ深く感得した人間として描かれていて、そのことは、エドガーの言葉のところどころにあらわれている。さきにみた「女の色欲の限りなき空間」(indistinguish'd space of woman's will) という語句が語られる一節でも、それにすぐつづいて「時が熟すれば」(in the mature time) という言葉があらわれるのも偶然ではない。

Edg.

Here, in the sands,

恣意の空間と摂理の空間(その一)

Thee I'll rake up, the post unsanctified
Of murderous lechers; and in the mature time
With this ungracious paper strike the sight
Of the death-practis'd Duke.

エドガ。この砂の中に埋めてやろう、こいつめ、

殺人をたくらむ姦夫姦婦の使い走りをした

けがらわしいやつを。そして、時が熟したら、

この不屈きな手紙を見せて、

殺されかけた公爵を仰天させてやろう。

この一節の趣旨には多少とも因果応報的な意味がないではないが、しかし、ここにはエドガー独特の時間の意識がにじみ出ている。というのは、「熟せる時」(mature time)という言葉はすぐ前の一節の、「色欲の限りなき空間」というイメージと照応しあって、われわれが恣意の空間と思っている主観的な世界にも、摂理としての時間が終始つらぬき流れていることを、暗示しているからであり、さらにまた、「mature」という一語は、エドガーの（摂理としての）時間の意識がもっとも熟した姿であらわれる「成熟がすべてだ」(Ripeness is all.)という五幕二場（九一一）の周知の一節を予示しているからでもある。リア救援のフランス軍は敗れ、王とコードリアは生け捕りになったと聞いて、またもや死への誘惑にかられるグロスターにたいして、エドガーが生きのびることを促す一節である。

Glou. No further, sir ; a man may rot even here.

Edg. What ! in ill thoughts again? Men must endure

their going hence, even as their coming hither :

Ripeness is all. Come on.

グロス。もう行かなくともよい。ここでも野たれ死にはできる。

エドガ。何です。またつまらぬ思案にくれるのですか。人間はこの世に出て来るのと同様、

この世を去る時を忍耐よく待つていなければなりません。

熟すること、それがすべてです。

この 'Ripeness is all.' につづいては、『ハムレット』五幕二場(二三四)の 'Readiness is all.' 「覚悟がすべて」との比較もあつてか、'To be ready for death is all in all.' というふうに変言・解釈する註釈が多いようである。しかし、同じく 'ready' という語で置きかえるにしても、その意味の含蓄は、『ハムレット』の場合とも、また註釈者各々の間でも必ずしも一様だとはいえないであろう。たとえば『アーデン・シェイクスピア』版の編者ケネス・シユア (*King Lear, The Arden Shakespeare edition, ed. by Kenneth Muir, p. 198*) は、この一句の註釈として、モンテニューの「哲学するとはいかに死ぬかを学ぶことだ」(To philosophize is to learn how to die.) などの数節とともに、トマス・エリオット卿の『統治者』(Sir Thomas Elyot: *The Governour*, 1531) にある次のような成熟論の一節を引用している。

成熟 (maturity) というのは、両極端の中庸、すなわち、何らの過不足のない状態のことであり、したがって、少しでもそれに増減があれば、成熟という言葉では呼びえない状態にあることなのである。ラテン語の 'maturnum' は 'ripe' または 'ready' と訳されえようが、それは、たとえば、果実が熟するとは、収り入れて食用に供するのに、まさに最適の状態にあるときのことをいう謂である。…こうして、成熟 (maturity) という言葉は、人間の行為に転じ用いられるようになったのであるが、そうすれば、行為をおこなうにあたって、何ひとつ過不足なく適切になされた場合に、それを円熟したやり方と言えるからなのである。…

ミューがこれを引用した真意がどこにあるかは必ずしも明らかではないが、しかし、この一節は、当面の 'ripeness' に関して、二つの（自明ではあるが）想起すべき事柄を示唆しているように思われる。その一つは、'maturity' にせよ 'ripeness' にせよ、その言葉の核心には、当然ではあるが、果実の成熟のイメージが大なり小なり含まれているということである。O・E・D の 'ripe' の項にも、果実または穀物の成熟の意味、すなわち「刈り入れや収り入れをしてよい状態になった。食べたり、種子として用いたりできるようにになった」(ready for reaping or gathering; ready for eating or for use as seed.) という語釈を、むろん、その第一義としてのせている。

この（あまりにも自明ともいえる）語釈とさきのエリオットの一節とを併せ読んでみると、'ripeness' について想起すべきいま一つの点がより明らかにってくる。それは、'ripe' を 'ready' と言いかえることは、ほとんど自動的といってもよい移しかえであるということ、そして、そのように言いかえた場合、対象が果実ならば、果実自体がその内的法則にしたがって成熟を成就した状態に達することと同時に、それを 'ready' と判断する上位者（としての人間）の眼差しまなざしが含まれている、ということである。（このことは、'ripe' を 'ready' に置きかえ

るまでもなく、本来“ripe”その語についてもいえることであろう。そうしてみると、果実を人間に移しかえて考える場合にも、死を迎えてよい状態にまで成熟した（と判断される）ということのなかには、たんに、人間の主観的・主体的な覚悟（readiness）だけではなくて、人間を見守る上位者たる神の眼差しまなざし、すなわち摂理、が含まれなければならないことになろう。さきに、“Ripeness is all”の一節に、（エドガーの）摂理としての時間の意識が、もっとも熟したかたちであらわれているといったのも、このことにほかならない。

(2) ここで“Ripeness is all”に関して、上位者の眼差しまなざしとともに、さらに、いま一つ想起しておきたいことがある。というのは、あの一句のイメージの核心に果実の成熟の隠喩をかすかにでもみとめるとするならば、果実は、それが成熟して収り入れられる（か落果する）までは、文字通りにも、また比喩的にも「宙づり」(pending)の状態で上位者の眼差しをあびているのであるが、ここでふたたび、果実を人間に移しかえてみるならば、人間もまた果実と同様に、摂理の眼差しのもとに成熟を待ちつつ宙づりになっているといえよう。そして、この比喩を浜セリ採り（とグロスター）の状況にあてはめていうならば、断崖の中ほどに「ぶらさがっている」(hangs)浜セリ採りの姿は、そういう人間の根源的な境位と、それに注がれる上位者の眼差しを、象徴的に黙示していることになろう。

エドガーの断崖叙景と、「成熟がすべて」という一節との間には、同一人物の言葉としての統一性があるのは当然であろうが、上のような意味でも、深い内面的な意味の統一性がひそんでいるといえないだろうか。さきに、断崖叙景の一節に、ある種の開かれた展望あるいは観照ともいうべきものが感じられるといったが、それは、“Ripeness is all”の一節に感じられる上位者の眼差しと究極的には同一のものである。いずれの場合にも、グロスター個人の運命を、人間一般の、ひいては植物の命をもふくめた万象の運命という視野にまで押しやって、

そこに注がれる高遠な摂理の眼差しのもとで、見すえようとする観照の在り方が感じとれるのである。そして、いずれの場合にも、たとえば、「されど、汝らの父の許しなくば、その（雀らの）一羽も地に落ちること無からん」（『マタイ伝』一〇章二九、ほか）という、より明白な宗教的な発言に通ずる意^{こころ}が、そこにいたる以前の域において慎重に抑制され、より包摂的な暗喩となつてのべられているのではないだろうか。また、そういう意味で、エドガーの最初の断崖叙景には空を飛ぶ鴉たちの姿が見え、さらに、グロスター投身直後におけるエドガーの再度の断崖叙景では、中空高く見えも聞こえない雲雀^{ひばり}のイメージがあらわれるのは、きわめて象徴的であるといえよう。

〔附記〕

『リア王』からの引用の訳は、斎藤勇博士の高訳（筑摩書房刊・『シェイクスピア全集』第七巻所収）に依らせていただいた部分も少なくないことを、おことわりしておく。